

東南アジアにおける民族服の研究(第2報)

タイ国アカ族の民族服飾

柴村 恵子 ・ 織田 恵子

Studies on Folk Costumes of Northeast Asia (II)

Folk Costumes of Akha in Thailand

K. SHIBAMURA and K. ODA

緒 言

東南アジアの大陸部には伝統文化を異にする幾種族もの種族集団(エスニック・グループ)が入り組んで分布している。特に中国南部および西南部からインドシナに至る広範囲の地域に分布する種族については、中国の文献記録の中にも古くから様々な名称で記されている。そして今日においてもなお、彼らの子孫がこれらの地域に足跡を留めている。言わばこの地域は、世界における民族学の宝庫の一郭とも言える。これらの種族のうちアカ族は、ビルマ、北部タイ、ラオスの国境付近の山岳地帯に住み、シナ・チベット語系に属する言葉を用い、特異な生活習俗を持つ山地民族の一つである。タイ国でのアカ族は、チェンライ県を中心に大小の村落を作り生活しているが、彼らは日常の衣裳や装飾を見ても一目で他の種族と区別ができるほど特異な特色を持っている。近年これらの山地民族の研究が盛んに行われる様になり、かなり多くの調査報告も出されている。しかし、民族衣裳についての研究は極めて少なく、白鳥(1978)・東南アジア山地民族誌、松本(1979)・世界の民族、カノミ(1980)・染織と生活No.28等の報文がみられる程度である。私たちは、この種族の服飾について、構成面および意匠面から考察を試みたのでここに報告する。

研 究 方 法

民族服飾の研究は現地に出向き、直接彼らの生活に触れ、そこで着用している状態を実際に観察し、それに基づき展開、解析を行うのが理想であるが、その調査に先立って、今回は次の方法により研究を行った。

- 1 実物については、国立民族学博物館所蔵の衣服9点、装身具10点を主とし、併せてカノミタカコ女史より提供された資料をもとにした。
2. 文献については、下記の文献を引用または参考とした。
 - (1) 白鳥芳郎(1978)・東南アジア山地民族誌
 - (2) カノミタカコ(1980)・染織と生活No.28
 - (3) 松本敏子(1979)・世界の民族服
 - (4) 岩田慶治(1971)・東南アジアの少数民族
 - (5) 梅棹忠夫(1978)・民族探検の旅
 - (6) 石井米雄(1979)・世界の民族II

(7) 白鳥芳郎 (1978)・季刊民族学 4

(8) G. Young (1969)・The Hill Tribes of Northern Thailand

結果および考察

上記の方法により研究を行い、得られた結果とそれについての考察を以下に述べる。

I 生活と習俗

1. 生活をとりまく環境

緒言の項でもふれたように幾種類もの種族集団が錯綜分布する東南アジアの中でも、中国南部および西部からインドシナ半島に至る地域には、それぞれ特異な生活習慣を持つ数多くの民族が住んでいる。その民族の際立つ特色の一つに、個性豊かな服飾が上げられる。特に女性の衣服や装身具には、それぞれ個有の型と意匠があり、ほぼ規格化されたユニホームの様に視覚的に識別する指標となっている。これらのうちでアカ族は近隣に住むメオ族やヤオ族に比べ、ひととき目立った民族服飾を身につけ、その生活や習俗もかなり異った面がある。これらを考察するには、彼らの生活をとりまく環境についてふれる必要がある。

この種族はイコー族、またはカーコー族とも呼ばれ、言語学的にはシナ・チベット語系に属し、その原郷は白鳥 (1978) によれば東部チベットから中国四川、雲南に求められると言う。また彼らは本来、牧民的文化要素を持って移動してきた民族として考えられている。そして彼らが次第に山地に入り山の生活を始め、いつの間にか山地民族になり、そこで彼らの生業形態を特徴づける焼畑農耕を身につけ、生活を支える様になったとされている。アカ族の最も大きな特徴の一つは、彼らにはインターナショナルな国境がない。カノミ (1980) によれば、現在タイ国には約1万人のアカ族が住んでいるが、彼らは村自体はタイ領にあっても、畑はビルマにあたりして国境を越えて自由に行き来している。また、彼らの生活を支えている焼畑農耕もかつては自由奔放に行われていたが、広大な照葉樹林にも限度があり、焼畑によって森林が二次化してきた事や人口の増加等により、最近では様相も次第に変ってきている。その実証として彼らは、数年後にはたいてい元の場所に戻って来る傾向が多くなっている。彼らは冬の終わりから春にかけて第2次林の一部を伐採し、しばらくそのまま放置し乾期の間に火を放って伐採した木や草を焼き払う。これを山焼きと言い、山焼きは“森の神の魂を慰める”という意味もあってこれを行っている。上記のごとく生活の主体は焼畑耕作による陸稲、雑穀、トウガラシ等の栽培であるが、この他豚、犬、鶏等の家畜、家禽も食用にするため飼育している。さらにこの種族は山奥に住むことが多く、官憲に発見されにくいという事もあってケシの栽培も盛んである。

以上アカ族の生活をとりまく環境の概要について述べたが、白鳥 (1978) は華南・東南アジアに居住する諸民族の構成をその生業形態の面からみた場合、3つに分類できると言っている。即ち、第1は山地民族の場合、部分的には狩猟や木の実の採集などによる自然経済に依存しながらも、焼畑耕作を主な手段として生活を支えている種族である。第2は平地で水田を主体とした稲作農民であり、華南・東南アジアの地で水田耕作を生業としている民族、即ち漢族やタイ族がそれである。第3には焼畑耕作民と水田耕作民の両者の中間を占める山麓、丘陵高原地帯に生活領域をもつ中間ゾーンに住む種族集団である。それは、カレン族をもって代表される。この分類によればアカ族は、生活環境や習俗は異っていてもリス族・メオ族などと共に第一分類に属する種族である。

2. 習俗

アカ族の住んでいる場所は、1000m以上の山岳地帯で文明社会と隔離された世界である。そのため彼らの生活の実態や習俗について深く把握することは困難であり、報文も少ないが、Young (1969)・白鳥 (1978)・カノミ (1980)らの報文を基にして考察を行った。

a. 信仰

信仰は山地民族の生活の中で、彼らが生きてゆくのに最も大きな拠り所である。アカ族の場合も同様であるが、その対象は精霊である。彼らは精霊（アニミズム）を深く信仰し、且つそれを恐れる。従ってすべての行事がこれに基づき行われる。この精霊は彼らをとりにくすすべての自然界の中に存在するもので、森林、泉場はもちろん、一匹の昆虫にも神々が宿っていると考えている。また、これらの神々の中で最も中心的なものが精霊の“ネ”と言われるものである。彼らはこの“ネ”を恐れおののきながら日々を過ごしていると言う。その例として、神にいけにえを捧げることが盛んに行われる。そして良い霊の存在を守り悪い霊の侵入を防ぐため、村の入口に門を作り、犬をいけにえとしてその項からぶら下げ、それが腐敗するまでそのまま放置するしきたりがある。結婚式や葬式に鶏や豚のいけにえを供えるなど、信仰は彼らの生活の中心となっている。従って祖霊“ネ”を共にいただかないよそ者は、何をかわからない危険な人物であるとして、自分たちの村に入り込んでくる事を極度に嫌う傾向がある。

b. 慣習

アカ族の生活も他の種族と同様、信仰を中心に生きているが、この他にこの種族特有の慣習も少なくない。それらの内、特に目立つものを上げると次の様なものがある。

アカ族の女性は男性によく尽し、男性以上の重労働に喜んで服す。男たちが寝ているうちに起きて、まず飯を炊き、もみを引き、家畜に餌をやり、背負い籠を背負って谷川へ行き水を汲んでくる。また、村から遠く離れた畑へ出かけて米や野菜を作り、斧を持って森へ入り薪をつくって家へ運ぶ。このような仕事が済むと機を織ったり、針仕事や装身具作りをしてよく働く。これら女性の働きに対して、男性はとてども及ばないところである。この様な重労働のみかえりとも言うのか、男女の交際は極めて自由である。若い娘たちはよく2個の小さいひょうたんを腰布に下げ、それが動くたびに挑発的な音をたてる。カノミ (1980)によればこれは、良い夫がみつかるようにと言わば幸運のお守りの様なものであるという。

夜になると歌ったり踊ったりして集団見合いが繰り広げられ、意志が通じれば結婚の相手がそこで決まる。彼らの婚前交渉は自由に認められているが、相手の男性の承認なしには絶対に子供は産めないしきたりになっている。なおアカ族の娘は、両親に相談しなくても自由に配偶者を決めて良いことになっており、結婚は11月～4月の農閑期がそのシーズンである。

アカ族の男性の衣裳については女性ほど多彩ではないが、女性の衣裳には極めて要求が厳しく、律義に伝統の服装を身につけない娘には求婚者が無いと言う。また男性は自分がどんなに粗末な服装をしていても、粗末な衣裳の女性が料理をした食事には手をつけ無いと言われている。

古くからアカ族には12の動物の名による暦がある。そして先祖の名前をできるだけ多く覚えなければならぬ決まりがある。男子が生まれると、祖父と父の名を先につけ、次にその子の名前をつける。従って一人前の男子の名前は三代の名前を含んでおり、その名前を聞けばその一族の出身がわかると言われている。また家名を存続させるには、男子が絶対に必要である。このため男子が得られるまでは、何人でも妻を迎えることが出来る。しかし、これ

らの妻に対して絶対に養う義務がある。

この他双生児が生まれた場合は、双方とも殺さなければならない。また、盲目など不具な子供が生まれた場合も殺さねばならないと言う悲しい掟がある。

アカ族の食生活は、焼畑農耕によって得られる陸稲とアワ、ヒエ、トウモロコシ等の雑穀による自給自足であるが、豚、鶏、犬などの肉食もする。中でも犬は好物で、よく食卓に出される。このためメオ族やヤオ族が飼っている犬は、アカ族の者が通ると盛んに吠えると言う。

II. 服飾

すでに述べたごとくアカ族は、その生活習俗において他の近隣種族に比べ多くの特色を持っている。その中でも、特に目立つのは服飾であるので、それについて以下に述べる。

アカ族は褐色の肌色をし、男性の身長は平均168cmほどであり、高地民としては高い方で頑丈な体格をしている。これに比べ女性は、平均身長135cmと低い。このことはアカ族の村特有の不衛生な生活環境によるものと思われる。このことはYoung (1969) も、アカ族の村は不衛生と社会的因習の漂う所であると述べている。しかし、同じ生活環境にありながら女性のみが背が低いということは、女性に課せられた重労働に起因するのではないかとも思われる。

以上述べた様な生活環境と貧困の中でありながら、彼らの服装は遠くからでも容易に他の種族と区別ができるほど色彩と形において特色を持っており、特に女性の服飾についてはそれが目立っている。次に男性と女性に分けて述べることにする。

1. 男性の衣服

男性の日常衣の着装形態は、図1に示す様な長袖のシャツ、ズボンとターバンである。しかし、祭の時などには縁に手の込んだ刺繍や飾り鉾のついたものを着用したり、銀のネックレスをすることもあがるが、基本的には日常着、仕事着、外出着の区別はない。

男性の上衣と下衣の形と寸法は、図2の通りである。それは濃紺の厚手木綿の生地できており、和服式に肩線は輪の直線裁ちである。また飾り釦にはコインやビーズが用いられており、脇線、袖付け線には縦地の赤や縁の布をはさみ込んでトリミングをし、裾にはスリットを作り腰廻りに余裕を持たせている。衿にはバンドカラーや小さなショールカラーがついている。ズボンは股下に裆の入っただぶだぶの型にできている。男性の衣服構成は以上の様であるが、彼らの場合、他の山地民族のメオ族やヤオ族等に比べて特別の変化は見られなく、中国の詰衿の国民服をルーズにした様なもので、中国からの流れを感じさせる。



図1 アカ族の衣裳

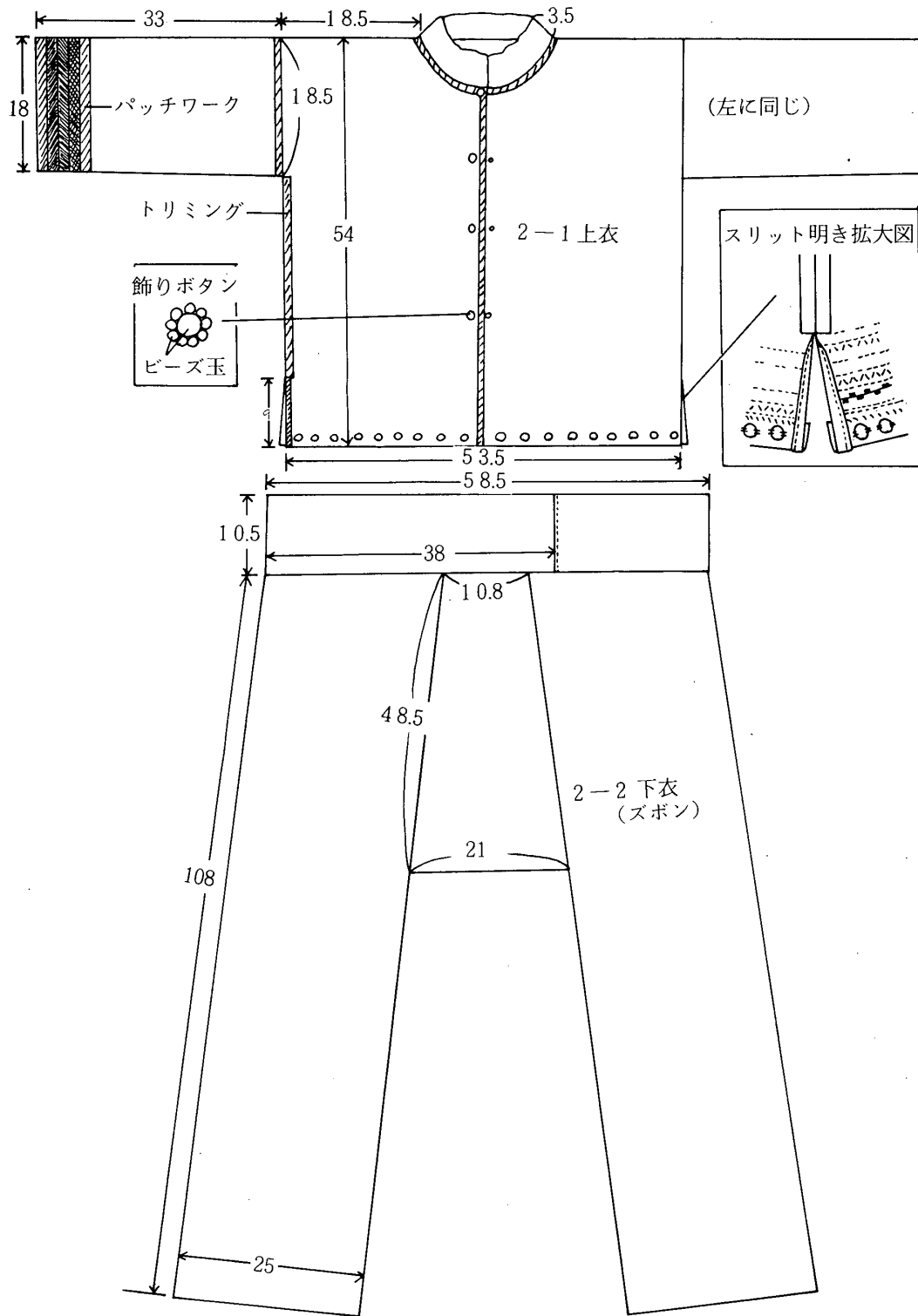


図2 男子の衣服 (単位cm)

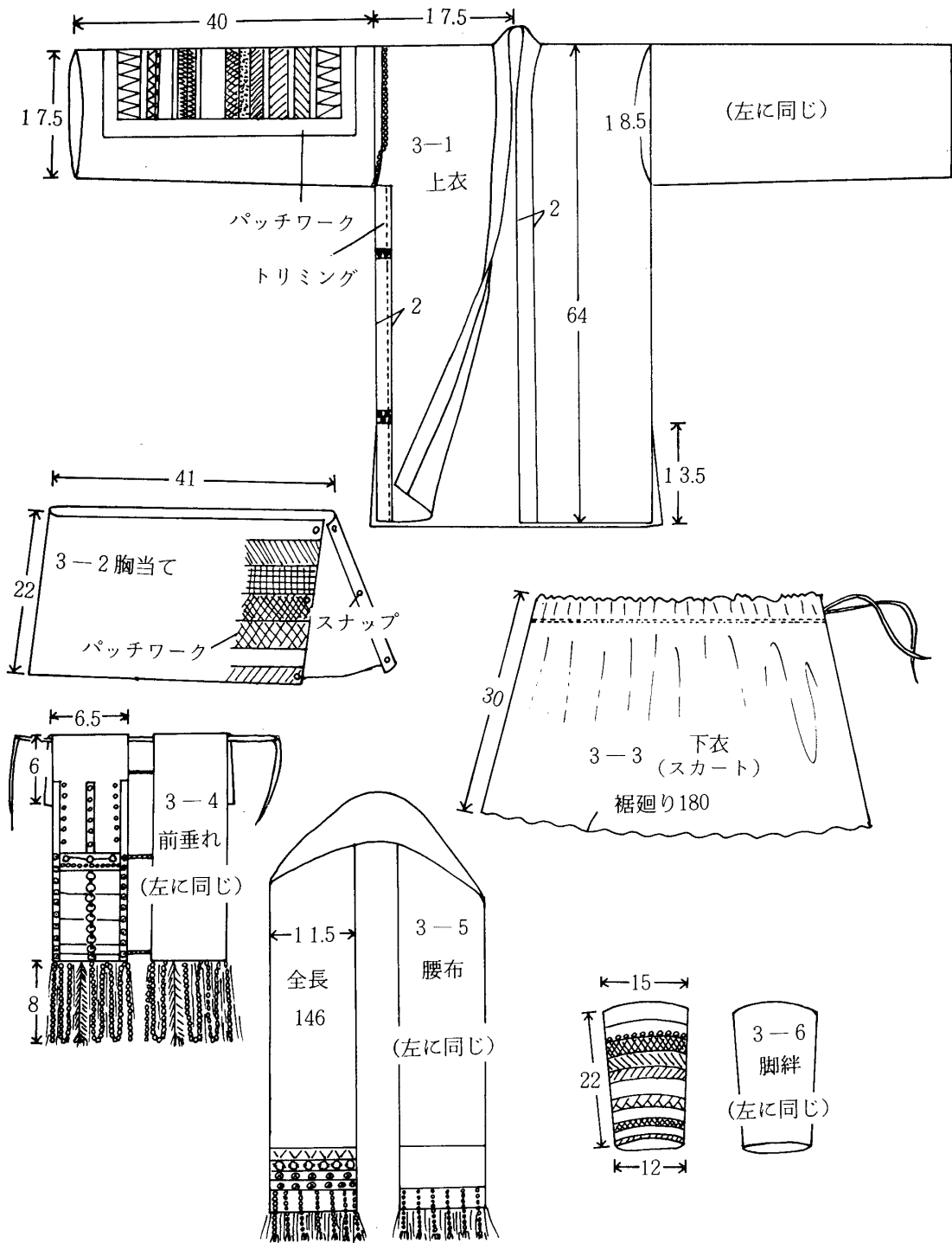


図3 女性の服飾 (単位cm)

2. 女性の服飾

a. 生地

生地は通常自家栽培の綿や麻から紡いだ糸を手機で織ったものを用い、染めは藍染めである。

b. 着装形態

着装形態は図3に示したように、上衣、下衣、胸当て、脚絆に腰布を結んで垂らすか、前垂れを下げ、それに帽子の組み合わせからなっているが、さらにネックレスやブレスレットをつける。

(i) 上衣

上衣は図3-1に示す通りであるが、生地は厚く濃紺で、和服の様な衿がつき、日本の陣羽織風である。装飾は前身頃よりも後身頃に多く、多彩色を用いて縞模様や手の込んだ刺繍がされている。その上から釦や植物の実、あるいはビーズが一つ一つ止めつけられていたり、また、ビーズを糸でつなぎ布に縫いつけ垂らすなどの装飾を凝らしてある。衿明きが少なく、着装すると首を前に突き出した様な姿勢になる。また、特色あるものの一つに胸当てがある。これは図3-2に示す様な形および寸法であるが、土台布に多彩色の布を接ぎ並べ、ビーズなどを止めつけたものや、前面の部分に高価な銀の飾り釦やコインなどがびっしり止めつけられ、よろいを思わせる様な重量感がある。この胸当ての着装方法は細い紐をつけて首から吊す。上半身はこの胸当てで下衣を組み合わせ、このままの姿で働く姿も見られる。最近タイ政府は副業として織物の奨励指導を始めたと言われるが、彼らは平地から近代的なものを取り入れ、ミシンのかけ方などについても指導され、新しい技術を習得しつつある。胸当てのとめ金が、コインと紐からスナップに変わりつつあるのも新しい技術の一つであろう。

(ii) 下衣 (スカート)

スカートは上衣等と同様濃紺の無地で、後染め厚手木綿が使われ、丈が35cm 足らずの超ミニスカートヒップ・ハンガーにして着装する。形は図3-3の様なギャザー形式のものと、前面のウエストにギャザーが少し入る程度の細身で、後に1cmに満たない細かいプリーツが多くとられているものがある。また、ヒップ・ハンガーの止めには、原糸60本ほど束にして通したものを紐として用いている。下衣の着装の上には、図3-4の前垂れか、図3-5の腰布のいずれかをしており、両者とも図4の様に多彩の布を接ぎ並べ、その上にボタン、コイン、高価な飾り釦、寶貝、数珠玉などを止めつけ、さらにサルの毛の束なども飾り大変手の込んだものである。これは装飾として用いる一方、下着をつけない彼女たちが、しゃがんだ時の慎みを保つ役目をも果していると言う装飾性と実用性を兼ねているものである。なお脚絆は野外作業に出る時、脚の部分を守るため着用するのであるが、他と同様な装飾がされており、筒状に仕立てられている。

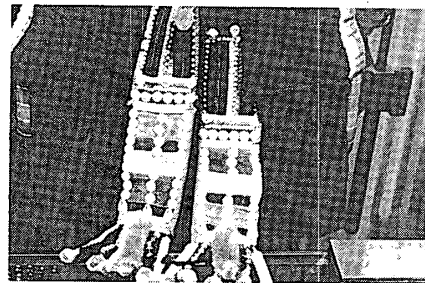


図4 前垂れ

(iii) 装身具

彼女たちは衣服を着用した上に、さらに図5の様なネックレスをする。それは貝や植物の実やビーズ等で作られている。なお儀礼用にはコイン、寶貝、植物の実などで作られ、さらに糸をより合わせたもので房を作ったり、サルの毛の束のついた430g程のいかにも重そうなネックレスをする。その他彼女たちは、他の種族に比べて装飾過剰と言われる特異

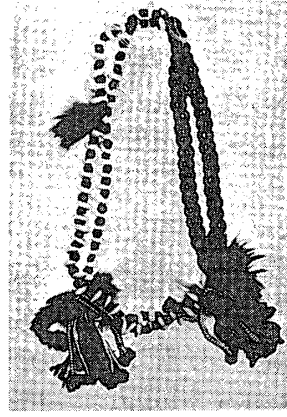
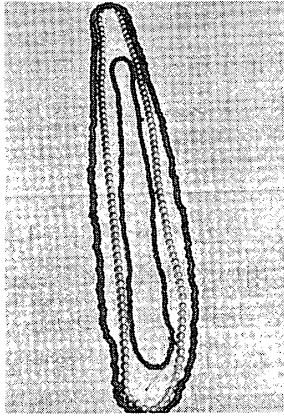


図5 ネックレス



未婚者用



既婚者用

図6 帽子

な帽子をかぶる。帽子は本来既婚者が用いるものであったが、現在では未婚の女性も用いる様になった。しかし、既婚者の方が先が尖り、装飾が多く、未婚者の方は平らで、装飾が少ない。既婚者は図6の様な厚手の木綿に竹を中に入れて張らせた上に、コイン、ボタン、植物の実、さらに高価な銀の鉾をふんだんに刺繍し、サルや鳥の羽根を赤く染めたもので全体を包んでいる。この様にして重いものになると4kg程もある帽子をかぶり、農作業に行く時はこの上にカバーをかける。このようにして帽子は寝る時も、病の床にある時はなすことはないと言う。これは宗教的理由に関係があると言われている。また、礼装時には、帽子の一部に犬のしっぽをつけると言う。カノミ(1980)によると、日本の戦国時代の兜に似ていると言う。また、それに付けられているコインには外国のものもあり、山地生活で他の民族との交流の少ない中であって、どの様な経路をたどって彼女たちの帽子にそれが付けられるのか全くの謎であるといわれている。

以上に述べたアカ族の衣服形態は、その流れをたどってみると多彩な布を帯状に継ぎ並べて縫い付ける技法で、それはリス族にも見られるが、チベット・ビルマ語系の言葉を用いる民族の特徴的な手法であると言えよう。また竹村(1979)によると、アカ族の衣服に縫いつけられている具、ビーズ、植物の実、コイン、飾り鉾などを装飾に用いる技法は、インドのアッサムおよびビルマを中心として広く分布し、東南アジアの服飾手法の一つでもあり、また銀製の装身具は一般に中国から導入した比較的新しい技法であると言われる。

3. 織りと染め

この種族の男性の上衣・下衣、女性の上衣・下衣・胸当て・その他すべてが手紡ぎの太い糸で織られた重い木綿である。織物の場合、他の種族の多くは座って機を織るが、アカ族は立ったままで織り、約50cm程の幅の布が織られる。また染めはカノミ(1980)によると、藍の葉や小枝を醗酵させて石灰を媒材とした染料で、黒に近い濃紺に染め上げる。この50cm程の幅の厚い木綿の布で、種族としての基本的な型を守り、衣服を作るにはおのずと型も限定されて

くる。しかし、その中に自分の好みなどを入れて作られた服飾は極めてみごとなものである。アカ族のように山地生活を行いながら数年～数十年で移動する種族にとって、衣服は種族を誇示する重要な目印である。即ち山地にあって自給自足の生活を営む種族は、労働に大半がつかやされることになり、そこでアカ族の住む風土と生活に結びついたもので、働きやすく、しかも山地の生活に潤いを添える美しい衣服が日常着として生まれるのも当然の成り行きであろう。従って自然に日常着にも手の込んだものを身につける事になり、さらに種族の特色を堅持することが必要な生活環境と相まって、機能面はともかく、日常美しく着飾ることを第一義とするようになるのも当然のことではなかろうか。

Ⅲ. 文化の交流と服飾の変貌

アカ族の民族服飾について材質、構成、装飾の各面から考察したが、これらの特色ある衣生活も彼らが永年かたくなに守り続けてきた山の生活が、平地民との直接・間接の交流によりかなり早い速度で変化しようとしている。この事について白鳥（1978）は、タイ国の山地少数民族についてラウ族を主体とした山地民族の生活や生業形態が、平地民との交流により近年急激に変貌し、彼らの伝統的な文化さえも失われてきていると述べており、カノミ（1980）もアカ族の衣裳を取り上げ、現地調査の結果、目で確かめ肌で感じた実感を述べている。その中に「文明にまみれる秘境の民族」と題してこれを取り上げ、農作業から帰った2人の女性のスカートがメオ族の手描きローケツ模様をそのまま印刷したプリント地であったり、美しいネックレスや上衣につけるみごとな植物の実等の房もそれにプラスチックのボタンが混っているなど、服飾の面にもかなり現代の簡易なものが取り入れられていると述べている。また、食生活においても、かつては陸稲しか栽培しなく、それを主食としていたこの種族も、最近では水稻栽培を始める様になったり、山奥では珍しいアイスキャンディー売りの姿が見られる様になった事も述べている。これらの事は、急激に近代化が進んでいる一つの現われの様に思われる。なかでも山地民族の服装に変化をもたらしつつあることは、大きな関心事である。そしてこの要因の一つが宗教である事も見逃す事は出来ない。彼らの信仰の中に仏教が入り込むことによりその布教者たちは、なり振りはそれほど重要な事ではないと説き、カトリックの宣教師の入り込む山地民族の村では、刺繍のデザインに十字架が取り入れられる様になった。さらにタイ政府は副業の奨励や、山中にも小学校を建てタイ語の読み書きを教えようと努力している。ここにも子供たちは伝統的な衣裳を脱ぎ、支給される制服を着なければならなくなる現実がある。この様に物質文明の波は、急速な勢いで彼らの生活のパターンを変えようとしている。そしていつの日にか、彼らが永年先祖から受け継いできた伝統的文化があとかたもなく消え失せてしまわない事を願うものである。

摘 要

東南アジアのうち、中国南部および西南部からインドシナに至る広範囲の地域には、民族学の宝庫と言われるほど多種多様な民族が住んでいる。この中でタイ国北部、ビルマ、ラオスの国境附近の山岳地帯に住むアカ族は、特殊な習俗を持つ。特に女性の民族服飾に特色を持つため、それについて実物と文献により研究を行った。彼らの生活習俗を詳細に調べると次の様な特徴がみられる。

1. 食生活は焼畑農耕により得られる陸稲、雑穀などを主体とするが、豚、犬、鶏などの家畜、家禽も飼育し食用とする。
2. 信仰はアニミズムを深く信じているが、中でも祖霊“ネ”を中心に神々を崇め、村の入口

には悪霊の侵入を防ぐ門が作られたり、信仰の違う人々をよそ者として警戒する慣習がある。

3. 衣裳について

- (1) この種族は女性の衣裳を重視し、男性は伝統の服装を身につけない女性には求婚しないし、その様な人の作った料理は食べないという厳しい慣習がある。
- (2) 男性の衣服は他の種族とあまり変わらないが、女性の衣服は華麗で手が込んでいる。
- (3) 装飾には、ボタン、コイン、貝、植物の実、高価な飾り鉾などを用い、帽子には装飾過剰と言われる程の飾りをつけ、サルの毛の束や犬のしっぽなども装飾用として用いる。
- (4) 衣服の生地は綿や麻から紡ぎ、藍で染めた厚手の布を用いる。

以上アカ族の生活習俗について述べたが、アカ族など山地民族も平地民族との文化交流が近年急速に進み、彼らの生活パターンが変化しつつあり、今日堅持されている女性特有の服飾にも次第に変貌が見られる様になった。そこで伝統ある民族服が現存する間に記録に留めたいと考え、近い日に現地を訪ね実際に見、確かめて調査研究を進める予定である。

最後に本研究をまとめるにあたり、終始懇切な御指導を下された岐阜大学教授中野刀子先生、親切な御助言を頂いた名古屋大学教授栃原きみえ先生、貴重な資料の提供と御助言を頂いた名古屋女子大学教授佐藤正孝先生および国立民族学博物館助教授大丸弘先生に厚く御礼申し上げる次第である。

文 献

- 1) 白鳥芳郎：東南アジア山地民族誌，講談社（1978）
- 2) 松本敏子：世界の民族服，161～175，関西衣生活研究社（1979）
- 3) カノミタカコ：染織と生活，28，104～108，（1980）
- 4) 岩田慶治：東南アジアの少数民族，日本放送出版協会（1971）
- 5) 梅棹忠夫：民族探検の旅第2集，学習研究社（1978）
- 6) 石井米雄：世界の民族11，平凡社（1979）
- 7) 白鳥芳郎：季刊民族学4，97～103，（1978）
- 8) G. Young：The Hill Tribes of Northern Thailand（1969）